

学会だより No. 79

2004年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

第60回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第60回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2004年6月26日（土） 13：30～16：45

会場：上智大学7号館14階特別会議室

プログラム

研究発表 13：30～14：15

小林隆二（本学博士後期課程）

対話によって「わかる」こと

プラトン『ピレボス』における「一と多」の議論について

特別報告 14：30～15：30

朝広謙次郎（東京家政大講師）

トマス・リードの観念学説批判（「概念学説」批判）

講演 15：45～16：45

松永澄夫（東京大教授）

「哲学の方法」

懇親会 17：30～19：30

会場：ソフィアンズ・クラブ

会費：3,000円

講演要旨

「哲学の方法」

松永澄夫（東京大教授）

あらゆることが哲学の主題となり、入り口となる。主題となるのは、哲学とは或る考え方のうちに生命をもつのであり、何についてでもその仕方での考察というものがあり得るからである。入り口となるというのは、哲学的仕方であらゆることについて、或ることについての考察は他の様々な事柄の考察を呼び起こし、すると、最初の事柄は、哲学的考察が成果とすることの中では一つの焦点としてのみ主題であり続け、結果全体との関係では一つの入り口であった、ということにならざるを得ないからである。

様々な理由で人は何かについて考え始める。問題の解決、よりよいことを求めての工夫、好奇心を満足させること……。しかるに、哲学は何か自分が自分とどのような関係にあるかを徹底的に考えるところに固有性をもつ。すると、なぜ或る事柄が問題として把握されているのか、よいとはどうしてなのか、なぜ求めるのか、好奇心を満たそうとする自分は何なのか、満たすことによってどんな新しさが出てくるのか、なども考える。そして、話題の事柄が、自分が生きて存在していることにおいて関わるさまざまな事柄全体の中でどのような位置にあるのか、見定めようとする。

結局、考える己を媒介に、ありとある事柄の位置測定へと哲学は進む。そこで、位置測定の方法が問題である。また、その、方法として駆使されるものがどのような事柄なのか、方法自身の位置測定も必要である。すると、哲学の方法は、さまざまな方法にそれぞれの意義を割り当てつつそれらを用い、それらを統合してゆく方法であり、その統合そのことの意味することにも自覚的な方法である。

さまざまな方法とはどのようなものか。最初の主題でもあり一つの入り口ともなる何らかのことから、さまざまなことへと考察が広がってゆくようにする列挙的方法、列挙したものを比較し分類すること、典型を立て、典型からの隔たりを測ることとして分類を見直すこと、分析の方法と、分析の道具と分析の結果の両方について反省し、定義の道を開くこと、定義の試みに関連して言葉と概念と事柄との関係を探ること、分析が可能である場合の背後にある、事柄の発生と事柄の理解と概念の順序関係との入り組んだ関係を明らかにすること……。そして、考察にたぐり寄せられるすべての事柄の浮かび上がりとその配置には、これまた入り組んだ諸々の価値文脈が働いていることを顕わにすること。

以上のことを、例に則して述べたい。

特別報告要旨

トマス・リードの観念学説批判（「概念学説」批判）

朝広謙次郎（東京家政大講師）

トマス・リードと言えばまず指摘されるのが、彼が「観念学説（the doctrine of ideas）」と呼んだものに対する批判です。しかし頻繁な指摘のわりには、内容は知られていません。しばしば知覚の哲学との関連で語られますが、おそらく観念学説がイギリス経験論と重なるからだろ

うと思われます。しかしリードは、「観念、判断、把握（apprehension）について提出されてきた諸々の公理（axioms）」が批判されるべきだと述べており、論題が知覚論でなければならない理由は窺うことができません。

リードの言う「公理」のひとつに、「観念の可能性は観念の対象の存在可能性を決定する」という命題がありました。「観念」は当時「概念性（conception）」とも呼ばれましたので、この命題は観念学説をもじって「概念学説」と呼ばれるでしょう。私はリードの観念学説批判は概念学説批判だったと考えております。この特別報告では、そのことを、すべての議論で例の命題を前提していたヒュームの『人間本性論』を引き合いに出しながら説明したいと思います。ヒュームは「知覚」を「印象と観念」に区別し、これらの間に起源の点での印象の先行性、内容の点での印象・観念の類似性を原理とするところから著作を始めていますが、例の命題は「形而上学で確立された原理」「哲学者たちによって一般に許容された（generally allowed）原理」として言及されます。ヒュームによる哲学的懐疑主義の前提がこの命題であることを知ったリードは、『人間本性論』そのものを帰謬法として用いることで、哲学者たちによって「受容された（received）学説」である観念学説を批判したのでした。

皮肉なことに、近世形而上学の根本的な欠陥をリードに知らせたのは「概念学説」を徹底して見せたヒュームだったのです。リードがヒュームに対して、「形而上学におけるあなたの弟子」だと自分を紹介したのもまさにこのためでした。

研究発表要旨

対話によって「わかる」こと

プラトン『ピレボス』における「一と多」の議論について

小林隆二（本学博士後期課程）

プラトン後期対話篇『ピレボス』はソクラテスによる快樂主義批判の書である。しかしだからと言って、ソクラテスが対話篇の中で掲げる問題は必ずしも倫理的・心理学的であるばかりではなく、時には形而上学的・宇宙論的テーマをも含む。人間の幸福に快樂がどの程度寄与し得るかという問題は、単なる個々人の生き方・人生観に尽きるものではなく、ここにおける快樂発生過程（31b-36c）・宇宙における万物の秩序と諸原因（23c-27c）・数における諸概念相互の関係（14c-20a）などを射程に入れる壮大な規模で語られねばならない、とソクラテスは考えている。

しかしソクラテスにとって、快樂主義批判の文脈の中で形而上学や宇宙論を語ることにどんな意義があるのだろうか。とりわけ本稿が問題とするのは、本対話篇における快樂論と形而上学の関係である。

本対話篇 14c-20a は「一と多」の議論と呼ばれるのだが、この箇所は『パルメニデス』129-131 と非常によく似ており、後者の箇所からは明らかに後期プラトンによるイデア論批判を読みとることができるので、多くの学者は本対話篇の「一と多」の議論をプラトンによるイデア論批判の箇所だと解釈してきた。しかし問題なのは、本対話篇の快樂主義批判という文脈の中で、なぜソクラテスはイデア論批判をしなけりばならなかつたのか、ということである。

本稿はこの疑問の答えを、対話相手プロタルコスProtagorasの議論に対する受け答えの変化から読みとってゆきたい。即ち、アイデア（一）と個物（多）の直接的関係によって際限のない議論をするのではなく、議論の対象（快樂）に対して数による「限定」(peras)を加えることで「わかる」議論をしたい、とプロタルコスに思わせ、それまで頑なに態度を示してきたプロタルコスを対話に参加させることがソクラテスによる「一と多」の議論の戦略だったのである。